

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	広島大学STARTプログラム台湾の運営と展開について：台湾の信仰、宗教文化から学ぶこと
Author(s)	嘉陽, 礼文; 楊, 明璋; 荒見, 泰史
Citation	広島大学森戸国際高等教育学院紀要, 5 : 27 - 55
Issue Date	2023-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/53980
URL	https://doi.org/10.15027/53980
Right	
Relation	



広島大学 START プログラム台湾の運営と展開について —台湾の信仰、宗教文化から学ぶこと—

嘉陽礼文・楊明璋・荒見泰史

はじめに —広島大学 START プログラムとは—

広島大学では、2010 年度より海外経験の少ない学生に留学を促すための導入型の短期派遣プログラムを START プログラムの名称で実施している。この START の名称は、はじめの一步の意味をあらわすイメージとして名付けられたことは言うまでもないが、Study Tour Abroad for Realization and Transportation の略称とも掛け合わされている。

募集対象として挙げているのは以下の学生である¹。

対象学生

・ START プログラム：学部 1 年次生（学部は問わない）

＊ 13 歳以後から広島大学入学前までの間に、31 日以上連続した海外渡航・在住経験がない者

当初は一年時のみの語学研修をベースとしたプログラムとして設計されており、担当教員による事前教育、グループ学習を経て本学の海外協定大学への、約 2 週間の派遣、現地における語学および文化等の授業の受講、現地学生との交流、現地施設等での見学ならびに実習体験等を通じて、その後の中長期の留学や国際交流への関心を高めることを目的としている。また、現地派遣に際しては、航空券や宿泊施設をはじめ現地でのプログラムに至るまで本学で手配をおこない、渡航時には本学の教職員が引率するという手厚いものである。渡航費や滞在費、現地プログラム参加費も本学で補助をしており、その参加費用を参考のため挙げておけば、渡航先により上下するものの、アジア圏であれば当初は一律で 60,000 円を上限としていた。

募集要項に挙げている費用は以下のとおりである²。

参加学生負担費用

派遣先による（6～19 万円／人）

¹ 広島大学ホームページ https://momiji.hiroshima-u.ac.jp/momiji-top/learning/start_2010-2020.html（2022 年 10 月 11 日閲覧）

² 上掲広島大学ホームページ。

- * 広島大学基金及び広島大学から支援を受けています
- * 別途、海外旅行保険料、国内交通費、前後泊宿泊費、現地食費・交通費の一部等がかかります。

最後の文言にもあるように、海外渡航のための保険料と、学生が現地で自由行動をとる際の交通費や雑費、土産代などは別途かかるが、大学の教育プログラムとして費用は極力抑えられていたといえる。自然、学生の中での人気も高く、成績、志望理由書、面接試験などによる厳しい選考があった。それぞれの研修の内容は、研修が行われる国や大学により異なるが、プログラムの募集、選考からプログラムの実施、運営についてはこれらを統括する全学ワーキンググループの下で行われ、プログラム間の平均化、公平化を図ったうえで、教養教育科目 [海外フィールドスタディ]として2単位が付与される。コロナ禍で渡航制限のかかる前の数字でいえば、2018年度には前期期間中に台湾、アメリカ、インドネシア、オーストラリア、タイの5コースと、後期期間中に台湾、オーストラリア、ニュージーランド、ベトナムの4コースを実施し、学部1年次生を合計で230名派遣している。

【図1】STARTプログラム派遣人数

	台湾	オーストラリア	ベトナム	アメリカ	インドネシア	ニュージーランド	タイ	スペイン
2010 年前期		20						
2010 年後期			24					
2011 年前期		24						
2011 年後期			34	25				
2012 年前期	24				24			
2012 年後期		24	24	24				
2013 年前期	24	24			24			
2013 年後期			24	24		24		
2014 年前期	23	30			24			
2014 年後期	17	30	24	30		30		
2015 年前期	18	30			24			
2015 年後期		32	24	30		30	24	
2016 年前期	30	30		30	24			
2016 年後期	24	30	24			30	24	20

2017 年前期	16	20		30	23		24	
2017 年後期	24	30	24			30		24
2018 年前期	28	20		30	24		22	
2018 年後期	24	30	22			30		
2019 年前期	25	25		28	19		23	
2019 年後期	中止	中止	27			中止		

* 広島大学 HP https://momiji.hiroshima-u.ac.jp/momiji-top/learning/start_2010-2020.html
(2018年3月28日掲載) 2022年9月28日閲覧分を参考に嘉陽作成

2017年度以降、STARTプログラムの上級生版としてSTART+（スタート プラス）プログラムが開設された。学部3年次生までを対象とするもので、語学力向上と国際協力への関心をさらに高めるための派遣プログラムとして、STARTプログラムと同時に実施している。START+プログラムは教養教育科目〔海外フィールドスタディ・アドバンスト〕として2単位が付与される。

募集対象として挙げているのは以下の学生である³。

・START+プログラム：学部2年次生及び3年次生(学部・海外経験は問わない)

* 一部コースのみ学部1年次生も対象

2017年前期に第1回が試みられ、オーストラリアへ26名が派遣された。2018年度前期はオーストラリア、リトアニアへそれぞれ20名ずつ、2018年度後期にはスペイン24名とカンボジア7名が派遣されており、2019年前期にはオーストラリアへ14名、リトアニアへ19名が派遣されている。コロナ禍で中断されるまでに合計130名の学生が派遣されていることになる。

重複するようであるが、以下は広島大学ホームページに掲載されているSTARTプログラムの概要である。

※ STARTプログラムは、海外渡航経験の少ない1年生に、海外協定大学での授業や生活を体験させることを通じて国際交流や長期留学への関心を高めるきっかけを提供することを目的としたプログラムで、2010年度から2018年度後期までに計61回実施しています。2017年度からは、学部2～3年生を対象にしたステップアップ版のSTART+プログラムも開始しました。本プログラムでは、

³ 上掲広島大学ホームページ。

研修費用を広島大学基金等から補助することで学生の経済的負担を大幅に軽減し、より多くの学生が留学に挑戦する可能性を広げています。

なお、START/START+プログラムは、それぞれ教養教育科目「海外フィールドスタディ」/「海外フィールドスタディ・アドバンスト」として実施しており、参加学生のグローバル・コア・コンピテンシー（世界で通用する人材として必要となる能力）の向上を目指しています。グローバル・コア・コンピテンシーは渡航前・渡航中・帰国後の3回にわたって自己評価を行い、行動計画を立てます。その後、担当教員のフィードバックをもとに、各学生が自身の行動計画を練り直し、実行に移します。成績評価では、参加態度・海外研修時の発表・帰国後のレポート等に基づき、総合的にグローバル・コア・コンピテンシーの向上を評価します。

また、参加学生は、帰国後のTOEICの自己到達目標を各自設定し、プログラム修了後も学習を継続していくこととなります。

START プログラム台湾の位置づけ

上述のような広島大学 START プログラムの中で、英語圏以外へも留学先を拡大させようとの試みで始まったのが START プログラム台湾である。2012年度からは国立政治大学の華語文教学中心での中国語教育と台湾史研究所での研修が始められた。2013年度の報告によりその概要をまとめれば、引率教員のほか3名の職員が同行し、24名の学生が渡航している。平日の午前中は中国語の授業、午後からは「日本と台湾の関係」、「人権発展史」、「歴史」、「経済」の講義を受けて植民地支配と台湾の親日について学ぶという内容である。講義のほかは、テーマに関連して二二八記念館、白色テロ景美紀念園区、中正紀念堂、鄭南榕紀念館、台湾民主基金会などの人権関連施設を訪問している。また中国大陸沿岸にある金門島を訪れ、国共内戦時代の中国大陸との戦闘の跡、軍事基地跡のトンネルや観測棟、八二三戦史館を見学している。なお、2018年度には金門島ではなく緑島を訪問し、当時に政治犯とされた人々の収監施設を見学すると共に、実際に収監されて後に生還した方から体験談を聞く機会を得た。

また、お世話になった現地大学スタッフや学生へのお礼として、広島大学学生による催しが通例となっていたが、2016年度 START プログラム 34 台湾では、国立金門大学の体育館において剣道三段の有段者4名による剣道形の実演が披露された。

同プログラムは担当者の変更はあったが、2019年度のコロナ禍前まで、前期期間中の START プログラム台湾としてコロナ禍まで継続されてきた。国立政治大学における本プログラムは台北車站（駅）前の宿泊施設から大学まで、公共交通機関（MRT（台北車站から動物園站）⇒路線バス⇒大学の構内バス）を利用して片道約50分～

60分程度の通学を要するものとなっていたため、学生は毎朝、台北車站近くに所在する宿泊施設のロビーに集合し、点呼の後に、班ごとに公共交通機関を利用しつつ通学した。その際には乗り換えや時刻表等を自身で確認しつつ実施しなければならないこと、交通ルールの違いや習慣の違いがあることから、学生たちも始めは戸惑うものの、プログラム中半からは積極的に公共交通機関を利用して放課後や休日の自由時間に観光や見学に出かけるようになっていた。この現象は後述するプログラムにおいても同様であり、学生の成長を現す事例のひとつである。国際室において START プログラムを統括していたスタッフからは⁴、台湾は比較的治安が良いことから、学生の安全対策（現地の交通事情についての事前の注意および現地におけるプログラム初日に各学生の携帯電話から引率教職員への携帯電話へのテスト連絡（緊急時の連絡のシミュレーション）の実施、警察および救急の連絡先の周知等）を徹底した上での門限時間内における班ごとの自由行動が広く実施されており、このことから学生は現地での成長に直結する重要な構成要素が、より深く獲得できている、と評価されている。

このプログラムから遅れること 4 年、2016 年度からは後期期間中に台湾の信仰、宗教文化を中心としたプログラムが開始された。中国語教育で一定の効果を上げてきた広島大学では⁵中国語圏への留学希望者も一定数おり、そうした学生を中長期の留学へと導く目的から、中国語圏への短期研修の枠を広げた形となった。そのうえで、近代以降の歴史と日台関係を学ぶ前期期間中のプログラムとの「住み分け」から、後期期間に実施されるプログラムでは、台湾を考えるうえで近代史と同様に重要である民俗史、宗教文化史をテーマとすることになったのである。台湾は、地理的にも文化的にも日本と近い面があり、観光地としても人気が高い。それでいてさらに一步踏み込もうとすると、外国人としてはなかなか踏み込みにくいという面もある。それは一つには政治的な面、もう一つには信仰を含む民俗的な面であろう。2016 年度以降、後期期間中に行われることになったプログラムはその後者であり、本稿で以下に報告しようと考えているのはその実施状況と発展の経過についてである。後期期間に実施されたプログラムはコロナ禍に拠る休止期間に至る 3 年度、それぞれ START プログラム 42、START プログラム 50、START プログラム 60 と命名されて実施された。その後には国立政治大学、さらには高麗大学との連携により、オンラインを交えた学生交流プログラムへと発展しており、新しいスタイルの学生交流プログラム、短期派遣プログラムの可能性の検討が始まっている。本稿では、そのプログラム発展の過程と、新

⁴ 2018 年 9 月 25 日 吉永幸恵 国際室主任（当時）の談。

⁵ 荒見泰史「大学初修外国語におけるオンライン教育の試み—covid-19 下の 2020 年度広島大学インテンシブ中国語連動クラスを中心に」、『広島大学森戸国際高等教育学院紀要』、1-21 頁、2022 年 3 月。荒見泰史「コロナ禍における 2021 年度初修中国語教育の試み—広島大学 TA 制度の活用による初修外国語教育への挑戦」、『広島外国語教育研究』第 25 号、221-237 頁、2022 年 3 月。

たなプログラムの構想について述べておきたいと考える次第である。

その論述に先立ち、以下にこれまでに行われた学生派遣プログラムの概要について紹介することから始めたい。

3. コロナ以前の START プログラム台湾

3.1. 2016 年度 START プログラム 42

START プログラム 42 は、2016 年 10 月から募集が始まり、参加者決定後の 12 月初めから事前研修が始まった。宗教信仰を含む民俗という課題は、低学年の学生にとっては当初ハードルが高かったと見え、5 班に分かれた学生独自による学習課題の設定の中でも、そうした課題を避ける傾向がみられていた。学習課題の設定に際して、学生の独自性を重視し、厳格にプログラムの趣旨に合わせた課題設定を行うよう指示を出していないこともその原因となったのであろう。

以下は START プログラム 42 の、学生の各班が設定した学習課題である。

- 第 1 班 「台湾の教育」
- 第 2 班 「台湾の葬儀」
- 第 3 班 「台湾の食文化」
- 第 4 班 「台湾の言語」
- 第 5 班 「台湾の媽祖」

教育する側も初めての試みであり試行錯誤の連続だったといえる。

派遣期間は 2017 年 3 月 15 日～2017 年 3 月 30 日であり、派遣先は天主教輔仁大学となった。準備期間が短かったことと、天主教輔仁大学では 2013 年度より中国語の語学研修を別途行っていたので、語学研修と START プログラムの 2 種類のプログラムを連続で行う形での実施を試みた。

天主教輔仁大学では、基本的に平日の午前中に中国語の語学研修が行われた。中国語未修者も多くいたため、レベル別に 3 クラスに分け、習熟度で分けて語学研修が行われた。また、中国語未修者のための語学体験として昼食時間を利用した英語ランチ会を実施し、天主教輔仁大学の学生およびスタッフらと英語による語学体験も実施した。語学研修、語学体験の合間となる自由時間には課外学習、グループ発表のための調査を行うよう指導しており、学生は現地学生と、あるいは本学学生のみで九份、龍山寺、国立故宮博物院、中正紀念堂などへ調査、見学に出かけていた。天主教輔仁大学は新北市に所在しており、学生は毎朝、新莊站近くに所在する宿泊施設のロビーに集合し、点呼の後に、班ごとに公共交通機関（MRT 新莊站⇒輔大駅の 1 駅）を利用して通学した。それ以前に実施していた台湾における START プログラムと同様に、

参加学生は放課後や休日には MRT をはじめ公共交通機関を駆使して観光や見学を実施し、時には乗り換え場所や行き先を間違ったりしながらも、学生同士で協力して、想定外のトラブルをも乗り越えることを学び、成長する姿が見られた。

また、3月25日、台中の大甲鎮瀾宮を中心に毎年行われる媽祖遶境の日程に合わせて一泊のバス旅行を行い、台中から嘉義に至る各地の媽祖廟を調査した。「媽祖」というのは「王爺」などと並んで台湾で最も信仰される神格の一である。中国宋代の湄州に実在したといわれる林默女の伝説に基づく信仰で、航海、漁業の神として中国沿岸一帯で信仰を集めている。媽祖は、天上聖母、阿媽、媽祖婆などの呼び名で親しまれているほか、元の世祖の時代には護国明著天妃、清の康熙帝の時代には天后に封じられたために、天妃娘娘や天后娘娘などとも呼ばれている。台湾各地にある天后宮は媽祖を祭る道観ということである。また「遶境」というのは、別に遊境、遊行、巡境、出巡などとも呼ばれ、神明が社殿を出て巡行することを言う。その意味は人間界に降臨して巡視する、人間界の悪鬼疫病を払うなどのほか、分霊された神明が元の神明のもとを詣でる、などである。媽祖遶境はこの後者の意味合いが強く、古くはその大本となる媽祖のもとを詣でていた。日本統治時代の昭和2年（1913）には湄州島を詣でることは禁じられ、北港の朝天宮を詣でるようになったとされる。そのさらに後に目的地が朝天宮から新港奉天宮へ変更となったのは1988年で、その後は今日まで奉天宮を詣でる行事となっている。台中の大甲鎮瀾宮から嘉義県の新港奉天宮までの往復約340kmを徒歩で9日間をかけて移動する台湾でも最大級のイベントで、2010年には中華民国文化遺産にも登録されている。

STARTプログラム42では、貸し切りバスで大甲鎮瀾宮から媽祖の行列を追いつつ、国立中正大学を訪問し、鄭阿財教授から台湾の媽祖信仰についての講義を聞いた。台湾最大の祭りに参加できたこと、それに関する研究者の専門的な講義を聞いたことは学生にとっては有意義であったと思われるが、実のところ当初よりそのような目的の研修であることへの説明が徹底されておらず、学生側の理解が低かったために、最終発表にこの内容が反映されることはあまりなかった。単なる観光ではなく研究活動としてのテーマ設定であることを、明確に示す必要を強く感じた一年であったと言える。

以下は学生の最終発表のテーマである。

第1班「台湾と日本の教育の違い、教官制度・大学入試について」

第2班「台湾のお葬式について」

第3班「台湾の食文化について（感じた事・戸惑ったことなど）」

第4班「中国語の日系外来語について」

第5班「なぜ台湾では媽祖が広く信仰されているのか」

また、お世話になった現地大学スタッフや学生へのお礼として、学ランを着用した

応援演舞を実施するとともに、折り紙による造花と、折り鶴を千羽制作したものを贈呈した。

3.2. 2017年度 START プログラム 50

START プログラム 50 では、準備時間が十分あったこともあり、前年のような中国語研修と同時開催的なプログラムではなく、独立したプログラムとして実施することができた。実施校も、本学の協定校のうち、2013年にはキャンパス内に広島大学台湾研究センターを設置している国立中央大学となった。

前年と同様に10月に募集を行い、選考結果発表の後の12月から事前学習が始まった。

前年と同様に引率教職員ならびに参加学生の、班ごとに学生が主催する渡航前事前学習会を設定し、渡航前に教職員担当2回、班別担当5回の事前学習会を行った。その内容は以下の通りである。

1. 事前オリエンテーション (1) 2017年11月14日
嘉陽「台湾の近代史」・荒見「台湾の宗教概論」
2. 事前オリエンテーション (2) 2017年11月28日
荒見「台湾の媽祖信仰」
3. 班別の事前学習会 (1) 2017年12月5日
第1班「台湾の歴史、宗教、原住民」および参加者の交流会
4. 班別の事前学習会 (2) 2017年12月20日
第2班「台湾における『地獄』とは何か」および参加者の交流会
5. 班別の事前学習会 (3) 2018年1月24日
第3班「台湾の政治経済」および参加者の交流会

* 第4班および第5班は、渡航前発表会2018年2月15日の時間に、勉強会用に準備していた情報（第4班「台湾の日系外来語とは」、第5班「媽祖について」）の発表を行い、参加者へ情報共有することとした。

渡航したのは2018年2月28日～2018年3月15日の間である。国立中央大学のキャンパスは台北から30キロほど離れた中壢の郊外にあり、当時は最寄り駅が高鉄（台湾新幹線）の桃園駅、台鉄（一般の鉄道）の中壢駅で、いずれからもバスで大学まで15分ほどの距離にある。この点は、はじめやや不便に感じたが、学生の宿泊先が学内の宿泊施設となったため最低限の移動距離は少なくなり、また逆に様々な交通手段を用いなければ移動できないため学生が現地の交通手段に、より早く慣れるという点では有効だった。

語学の授業は中国語クラスのほか、英語クラスの受講も可能となった。授業で英語でのコミュニケーションに接していたこと、英語の堪能な学生チューターを配置されたことにより、前年度よりも抵抗なく英語でコミュニケーションをとる学生が増え、学生の間では日本語、中国語、英語の3言語による交流が自然に行われていた。当初中国語クラスと英語クラスとの溝が生じることを懸念したが、事前学習ですでに班別活動を行っており、各班には英語の授業を受けるもの、中国語の授業を受けるものがランダムに配置されていたため、その点は問題無く実施された。もちろん、担当者の前年の経験も大いに役立った。

中心テーマとなる宗教文化に関しては、この年は台湾で最も信仰を集める王爺信仰を主題とし、現地における調査先も、それに合わせた場所を選定した。講義としては、国立政治大学楊明璋教授から「台湾の文化と宗教」についての講義を受け、王爺信仰に近い宗教施設や儀礼を多く参拝した。

王爺は、台湾で最も信仰を集めている神格である。ただそのシンプルで様々な意味を含みうる王爺という名称から、異なる複数の信仰が融合しており難解な部分がある。

名称から簡単に解説しておくならば、王爺とは本来的には皇帝に次ぐ「親王」「群王」、つまり皇族男子の位として、あるいは群臣の一としての諸王を、親しみを込めて呼ぶときの尊称である。また場合によっては王姓の年長者を、親しみを込めてこのように呼ぶ場合もある。日本語で言うならば「王さん」「王さま」くらいの感覚であろうか。

台湾の王爺信仰の基本となる神格は李大亮、池夢彪、呉孝寛、朱叔裕、范承業という唐太宗時代の功臣で後に祀られるようになった五王である。これを民間信仰では五府千歳、五位王爺神とも称している。明末にこの五王の神像を乗せた船が台南の南鯤鯓に漂着し、これをもとに南鯤鯓廟、今日の南鯤鯓代天府が建てられ、台湾の王爺信仰がはじまったと言われる。瘟神とされ、天帝の命を受けて人間を巡察し、人の善悪を見て褒章や懲罰を決め、また人々のために瘟鬼や疫病を払うともいわれる。また、台湾の王爺は媽祖と同じように航海安全の神として祀られることが多い。これらは台湾の信仰の地域的特徴と言えらると思う。

こうした進行を基本としつつも、俗界を映す中国の天界観において天帝に次ぐ神祇としての王がおり、また王爺が一般的な名称でもあることから様々な「王」が混同或いは融合し、信仰対象が複雑化させているという事情もある。今日では李、池、呉、朱、范の五姓以外の姓の王もおり、俗説では、王爺は三百六十の進士の化身であるとも言われている。STARTプログラム50で参拝した青山靈安王は本来山岳信仰に関わるとされるが、やはり王爺の一ともされている。

「王爺」をテーマとした今回の活動で、はじめの見学は艋舺青山宮で行われた「代

天巡狩」の参拝であった。この行事は通常、靈安聖王の聖誕節 10 月 23 日に合わせて行われるが、この年はこの 3 月にも行われるということだった。

艋舺青山宮は、台北市万華区貴陽街にある咸豊六年（1856）創建の古刹である。艋舺とは、現地語で丸木舟の意味をあらわす言葉に漢字をあてたものであり、のちに万華という音訳語も充てられたために、古名として艋舺が用いられるが、現代の地名では万華とされる訳である。この地は淡水の下流域で泉州からの移民が多く移住した地域であり、この艋舺青山宮は泉州三邑の惠安人の信仰の中心となった。青山宮の青山というのは、惠安にある山で、そこに張氏を主神として祀ったものとされる。ただこの張氏を三国呉の張滾とするもの（明・何喬遠『閩書・惠安県観応篇』）と五代十国の張愐とするもの（明・『惠安県志』）と意見が分かれている。しかしいずれにしても青山の近くで祀られている張氏という点では一致し、山神、土地神として青山王として親しまれてきたものとみられる。また土地神、城隍廟としての司法神としての性格から、陰陽司、監察司、速報司、長寿司、獎善司、罰惡司、福德司、増祿司等の司官や、文武判官、謝將軍、范將軍、枷鎖將軍、馬使爺と虎爺等を従える冥府の神でもある。START プログラムで参拝した「代天巡狩」でもこうした神々を従えたお練りは極めて壮観で、学生たちを大いに魅了した。

続いて 3 月 9 日～11 日までの二泊三日をかけて、台南の調査へ行った。調査した主要な箇所は赤崁樓、熱欄遮城博物館（元熱欄遮城城跡）、台南府城古蹟（安平古堡）、鄭成功義和園、文龍殿、麻豆代天府、関聖帝君、花園夜市、井仔脚瓦盤塩田、学甲慈濟宮、台江国家公園（四草綠色隧道）、祀典武廟、南鯤鯓代天府である。

この中で、王爺信仰と密接なかかわりを持つのが南鯤鯓代天府と麻豆代天府である。南鯤鯓代天府は先にも言うように台湾の大爺信仰の発祥の地ともいえる場所である。また麻豆代天府は、「十八地獄」という地獄のテーマパークともいえる地獄の造型が施された空間があり、子供から大人まで地獄を実体験できるようになっている。

なお、王爺信仰を中心とする台湾の信仰の状況については、国立政治大学楊明璋が講義を担当した。

以上のような見学を通じて、グループ学習を行う各班が選んだ学習課題は以下のとおりである。

- 第 1 班 「台湾と民族」 民族（アイヌ、福佬人、客家人、原住民政策）
- 第 2 班 「台湾の地獄」 地獄
- 第 3 班 「台湾の科学技術」 台湾の科学技術の展開
- 第 4 班 「台湾の自然環境」 大気汚染
- 第 5 班 「台湾の食文化」 食の歴史的背景
- 第 6 班 「台湾の移民と宗教」 万華、龍山寺、神仏習合

また、お世話になった現地大学スタッフや学生へのお礼として、2018年2月6日に発生した花蓮地震被災地への海外救援金による支援を同年3月13日に実施した。海外救援金の振込先は花蓮県政府花蓮県社会救助金専戸（花蓮県社会救助専戸）であり、学生および教職員から集まった金額は\$ 10,000（NTD）である。振込手続きに際しては国立中央大学国際処の協力を得た。

3.3. 2017年度 START プログラム 60

START プログラム 60 の派遣先は前年度と同じ国立中央大学となった。

学習テーマも民俗史、宗教文化史と同様で、前年までと同様に10月に募集を行い、選考結果発表の後の12月から事前学習が始まった。引率教職員ならびに参加学生の班ごとの渡航前事前学習会も前年度と同様で、渡航前に教職員担当2回、班別担当5回の事前学習会を行った。3年目にしてようやく軌道に乗ったという印象であった

START60 台湾における班別学習課題は以下の通りである。なお最終発表の題目も以下と同じであった。

- 第1班 「台湾の信仰とその多様性」
- 第2班 「台湾と日本のつながり・移住者の多様性」
- 第3班 「日本と台湾の文化的関連」
- 第4班 「台湾の政治・企業」
- 第5班 「台湾の歴史・原住民」
- 第6班 「台湾の食文化」

2019年3月3日から3月17日までの期間、国立中央大学において現地での活動を行った。講義に関しては前年度とほぼ同じで、午前中は中国語班と英語班に分かれて語学の授業を受け、午後は文化体験授業のほかは班に分かれた学習と、野外調査となった。

実施期間中の2019年3月9日から2019年3月11日にはエクスカージョンを実施した。このエクスカージョンでは毎回テーマを設定していたが、過去2年にわたり台湾の最も代表的な信仰である王爺と媽祖の調査をすでに行っており、テーマ設定はやや悩ましいところであった。言うまでもなく参加する一年次の学生にとっては経験のないものではあるが、学生は先輩からの知識を継承しており、大学で実施するプログラムとしての蓄積を考えると、昨年、一昨年と同様のテーマでない方が良いように思われたのである。スタッフ間での熟考の結果、重層的な台湾文化をさらに深く考えるため、同時に同じ意味で学生の関心の高い「原住民」をテーマとすることになった。

なお、台湾において「原住民」という名称はネガティブな意味合いはなく、中国系

移民が始まる以前より現在に至るまで居住している人々といった意味合いを持つ。「先住民」と表記しないのは、漢語では後先という感覚、つまり以前、過去にいた人々と後から入ってきた現在の人々という意味が生じるからであり、今日でも共存している人々という意味、さらには先に居住していた人々という敬意を込めてこう呼ぶのだという。原住民は今日の台湾文化に溶け込み、どこでも生活をしているが、とくに多くの原住民が生活し、独自文化を保存するための活動が活発な台湾東部を目指すことになった。ただ、時間も限られているため花蓮県の太魯閣峡谷周辺を中心に見学、調査を実施することになった。

台北からは移動時間の短い台湾鉄道を利用し、現地でバスをチャーターしての移動となった。花蓮県では、アミ族の伝統舞踊、タロコ族の伝統料理、太魯閣峡谷の見学（日本統治時代の原住民および歴史学習ならびに国道建設の犠牲者慰霊碑への参拝、花蓮県～台北間に所在する寺社の見学等）、移動には台湾鉄道および貸切りバスを使用した。太魯閣峡谷の見学は、直前に発生した落石事故による影響を受け通行止め箇所が複数発生した、そのため見学先を急遽、変更しつつ安全な場所を選び実施した、この際には現地ガイドの黄国豊氏による臨機応変な対応により、制限時間内における安全且つ有意義な見学ルート選定が実現された。熟練ガイドの力量が学生に及ぼす恩恵を実感する経験となった。

恒例となったエクスカージョン先での専門家によるレクチャーでは、国立東華大学の劉惠萍教授に「台湾原住民族の生活と神話」という題で講演をお願いした。

STARTプログラム60の学生はプログラムの趣旨を理解し、調査につなげて発展させる学生も多く、成果発表も想定されるレベルを大きく超えていた。3年かけてようやく海外研修プログラムとして外に出しても恥じない形となったと自負している。中には3年後の卒業研究で日本統治時代の原住民政策を取り上げる学生もいた。

なお、お世話になった現地大学スタッフや学生へのお礼として、日本茶のお点前の実演、荒見が学生全員の名前を織り込んで作った漢詩を学生が揮毫し、書道作品としたものを、国立中央大学国際処に贈呈した。

なお、上記3回に及ぶプログラムにおいて、トラブルが起こらないよう細心の注意を払ってきたが、それでも若い学生を引率するプログラムでは突発的なトラブルも発生している。その点に関しては、本文末に事例をまとめて挙げておくことにする。

4. コロナ禍以降のSTARTプログラム台湾

2019年度後期に募集が開始され、例年通りにその回の全てのプログラムにおいて事前講義や勉強会等の準備が進行していた。STARTプログラム70台湾も12月3日時点で班ごとの学習課題は決定しており、2月の渡航に向けて調査および発表準備が進

められていた。START プログラム 70 の班別研究課題は以下の通りである。

- 第 1 班「台湾の言語・教育」
- 第 2 班「台湾の宗教（地獄）・原住民」
- 第 3 班「台湾の政治・自然環境」
- 第 4 班「台湾の食」
- 第 5 班「台湾の芸術」
- 第 6 班「台湾の親日・サブカルチャー」

2019 年度後期に予定されていたプログラムの中で、START プログラム 67 ベトナム（渡航期間 2020 年 2 月 12 日～2 月 27 日）までは、ほぼ予定通りに渡航プログラムが実施された⁶。しかし、渡航の出発日がわずか 1～3 週間違いの後発組であった START プログラム 68 オーストラリア、START プログラム 69 ニュージーランド、START プログラム 70 台湾、START+プログラム 9 カンボジア、START+プログラム 10 スペインは、コロナウイルス拡大のため、中止となった。中でも START+プログラム 9 カンボジアは、渡航の前日になって中止が決定され、航空機の予約の関係で福岡空港発を予定していたため多くの学生はすでに福岡に到着していた状況で、学生たちには気の毒なことになった。ちなみに言えば、この学年のほとんどの学生はその後 2023 年 3 月の卒業まで広島大学の留学プログラム参加の機会に恵まれない学年となる。

ただ、この年度から直ちにオンラインによる海外体験が試みられている。この START プログラム 70 台湾こそが、広島大学では初めてのオンライン海外研修となったのである。渡航中止後ただちにオンラインによる実施の検討が始まり、4 月には担当教員による講義、以前の START プログラムで撮影した媽祖や王爺の儀礼映像を編集して学生とともに視聴し教員が解説をおこなった。急繕いのためプログラム最終発表は START プログラム 70 台湾と START プログラム 68 オーストラリアとの合同となり、発表会も合同となったが、START プログラム 70 台湾担当引率教職員 2 名があわせて指導を行った。今にして思えば単純なオンライン授業ではあったが、オンラインで行う海外研修の検討につながる良い機会となったと思う。この時の経験から広島大学国際室では e-START プログラムというオンラインのみの海外研修プログラムの検討が始められることになったのである。

4.2. 国立政治大学で行われた文化プログラムとのコラボレーションの経験

⁶ 広島大学ホームページより [学びのサポート](https://momiji.hiroshima-u.ac.jp/momiji-top/learning/start_2010-2020.html)
https://momiji.hiroshima-u.ac.jp/momiji-top/learning/start_2010-2020.html (2023 年 3 月 9 日閲覧)

このオンライン授業への移行とその後の発展には、2019年度に試みられたもう一つ別の台湾文化プログラムが実は深くかかわっている。それは START プログラム台湾で協力を続けてきた国立政治大学楊明璋の発案で計画され、START プログラムで培ってきた教育もとに 2019 年度に荒見とともに実施した「台湾華人民俗文化与田野実務」プログラムである。

2019 年国立政治大学では「教育部高等教育深耕計画 (Higher Education Sprout Project)」を遂行中であり、そのうちには「華人文化之国際連結：国際漢学与華語文」、「全球与区域發展：台湾与亜洲經驗」の二つの「發展重点領域」とされる範囲でのプログラム予算の申請が可能であった。これを広島大学との共同で実施し、中国語を使用言語の主とし日本語を補助言語とする国際プログラム「台湾華人民俗文化与田野実務」を開設した。本プログラムは、具体的には「台湾華人民俗文化」に焦点をあて、日本人教員、台湾人教員と両校の学生がこの同じテーマのもとに議論を進め、相互の経験と知識を交換しあい、両校の教員と学生の国際的視野を広げるという試みであった。アメリカの学者エドワード・T・ホールが「文化はコミュニケーションであり、コミュニケーションは文化である」(『沈黙の言語』1959年)と指摘しているように、本プログラムでは、コース設計においては民俗文化のテーマの討論とフィールドワークを絡め、理論と実践の融合に加えて異文化交流を深めるものとし、両校の学生は授業中のディスカッションやフィールドワークでグループでの共同作業を發展させ、国を隔てた両校の学生の相互の学習成果を学びあえるように設計することが重要であると考えたのである。

両校の協力により、国立政治大学の正規授業科目として申請し、「国際生(短期交流学生を含む留学生)」受け入れを可能としたうえで履修者を募り、12名の広島大学学生がこの国際プログラム参加した。国立政治大学での実施であり、広島大学学生の渡航期間は2019年9月22日から29日までとなった。そして翌9月23日から27日までの5日間、台北市文山区に位置する国立政治大学で、5名の台湾での履修学生を合わせ、日本と台湾の計17名の学生、3名の教員で、合計36時間の集中講義を行った。

本プログラムの主題は「台湾華人民俗文化」とし、「漢語、漢字与台湾文化」、「台湾的歳時節慶」、「台湾的宗教信仰」、「台湾的生命禮儀」、「台湾的物質文化」の五つの単元から授業を組み立てた。対象学生は先に言う日本から参加した12名と5名の台湾人学生で、このうち日本人学生のためには概論的部分にも触れなければならないため、比較的日本にもなじみのある台湾華人の民俗文化を中心テーマとすることとし、さらに各単元には日本文化との比較も織り交ぜて講義と討論がすすめられるように設計したのである。例えば、東アジアの中華文化圏に共通する十二支を論じる際には、台湾の華人文化で配当される動物とそれに関わる習俗だけでなく、日本での習慣との比較

を交え、台湾で行われる華人の祭りでは七夕や重陽の節句など日本と共通性のある点を紹介し、また台湾の民間信仰における神々の起源について、歴史上の実在の人物が神聖化されて神となった例を取り上げつつ、日本における神々との比較として例えば京都の祇園祭を例に挙げて比較するという工夫を行った。またその要所要所には例えば台湾でポエを投げ（擲筊）て縁結びの赤糸を求める文化など台湾独自でありながら日本人にも人気のある祭りや儀式の説明を加えてある。これにより、日台学生のそれぞれの知識の上での優位性を引き出し、討論を活性化させようという仕掛けなのである。ただ、これらの授業と討論では、大学院生も含まれており学術的知見も踏まえることが要求されていたため、その分学生たちの議論や成果発表の内容も高度化し、教える側の力量も試される講義と討論だったと思う。

また、この教育内容の主題と各単元の内容をフィールドワークとも組み合わせ、教室で教えられ議論された民俗文化の知識を実際に体験できるよう設計した。このような文化体験は、学習者が「台湾華人民俗文化」というプログラムの核となる内容を理解するのに十分な効果があったと思う。また、日本人学生の中国語学習、台湾人学生の日本語学習にも大いに役立ったと思う。そしてプログラムの最後には、「台湾華人民俗文化田野工作実務主題成果発表（台湾華人民俗文化フィールドワーク実践発表会）」という最終発表会を実施した。各自がテーマを選び、集中講義と討論、そしてフィールドワークで見聞きしたこと、考えたことを発表するという総括的な会となったのである。

両校の学生の最終発表会の内容は多様だった。例えば広島大学の学生の発表テーマのうち、日台の民俗文化の比較では「台湾と日本の仏像比較」、「日本と台湾の灯籠」、「台湾の祭りと日本の祭り」があり、台湾の民俗文化を対象とする者には「台湾の祝日」、「台湾の寺院の様式からの儒教・仏教・道教の考察」、「おみくじと靈籤」、「台湾における移民と文化」があった。中には台湾の「發票（領収書）」及びそれに付属する懸賞に気づいた学生の調査報告もあった。国立政治大学学生の発表テーマは「台湾金香文化与現代衝突」、「台湾的虎爺信仰」等であった。これらの論題は確かに日台の民俗文化と深く関わりのあるもので、日本と台湾の交流と同時に日本と台湾の民俗研究、漢学と華語文の研究にとり相互理解に役立つものと言えた。

以上のプログラムを総括するならば、本プログラムは、台湾華人の民俗文化を主題としつつも、日台の学生が日台文化との比較から広い面でこれを捉える機会を得られたことに重要な意味があり、またそれを捉える上で講義という刺激だけではなく日台学生の議論とフィールドワークという実体験をともなう共同作業であったこと、そして成果発表会により生身で体験した知識を総括するという手法により、目的を実現に、より近づけることができたと言える。要は両国の学生が互いに学びあう機会が提供され、その両者ができるだけ平等に学べるように工夫したことにより、東アジア文化を

テーマとしつつ異文化コミュニケーション能力を身につけ、さらには中国語、日本語の表現・学習への関心を強めることができたといったところであろう。

このプログラムは一回限りのものだったが、国立政治大学の郭明政学長の強い支持を得ることができ、その後の発展が模索された。国立政治大学では日本語系、韓国語系にも呼びかけが行われた。広島大学総合科学部のほか韓国の高麗大学校文科大学中国語中国文学科とも合同で検討が進められ、3カ国3大学5学科が連携して「東亜漢学と文化」をテーマとする学生プログラムの実施を中心とした協定が結ばれることになった。この国と学部を超えた共同プロジェクトは、2019年10月中旬から下旬にかけて緊密に協議を重ねられ、2019年12月20日に韓国の高麗大学で学術協力・交流に関する意向書の調印式が行われた。残念だったのは、2020年の夏季休暇期間に学生交流プログラムの第1回開催を計画していたが、コロナ禍により順延されたことである。かくて2022年8月によりやく第1回プログラムをオンラインで開催することになった。言うまでもなく、広島大学でそれまでにe-STARTプログラムとしてオンライン海外学生プログラムを行っていたことによるところが大きい。3カ国3大学5学科プログラムの第1回の期間は8月8日から8月13日の6日間で、計画に参画した3ヶ国5学科で「東亜漢文文学と文化（東アジア漢文文学と文化）」国際プログラムとして開催された。授業提供をした教員は鄭家瑜教授（国立政治大学日本語系）、涂艶秋教授（国立政治大学中文系）、楊沅錫教授（高麗大学）、林侑毅教授（国立政治大学韓国語系）と荒見の5名で、学生による共同研究活動、成果発表を交えて行われた。以下はプログラムの時間割である。なお、広島大学側ではe-STARTプログラムの一環として行われた。

東亞漢文文學與文化課程課表

日期 時間	8/8	8/9	8/10	8/11	8/12	8/13
9:10-10:00	課程說明 全體老師	中日比較神話・台 日神話與信仰 2 鄭家瑜	韓中五百年交流的 見證：燕行錄文獻 概述 林侑毅	漢字文化圈民俗傳 說與宗教信仰 2 荒見泰史	韓越使臣的漢文詩 文交流與競逐 林侑毅	成果發表與結業式 全體老師
10:10-11:00	-10:30 課程說明 中日比較神話・台 日神話與信仰 1 鄭家瑜					
11:10-12:00						
12:00-13:30	午休					
13:30-14:20	早期中國佛教與文 化的衝突與融合 1 涂艶秋	漢字的東傳及東亞 漢字文化的形成與 發展 楊沅錫	漢字文化圈民俗傳 說與宗教信仰 1 荒見泰史	韓文和漢字・韓語 中的漢字 楊沅錫	早期中國佛教與文 化的衝突與融合 1 涂艶秋	
14:30-15:20				分組討論與指導 全體老師		
15:30-17:00				分組討論與指導 全體老師		

※本表時間為台北時間（GMT+8），東京首爾時間（GMT+9）版本請見次頁

※休息時間將隨上課進度由授課老師調整

総じて、この国立政治大学と高麗大学とのコラボレーションプログラムを通じて、これまでの START プログラムではない、大学院生まで参加できる海外研究プログラムで、語学研修を交えずに専門教育のみを行い、これに学生交流活動を結びつけたプログラムとして実施できたことは重要な経験となった。学生にとっても研究上の人脈を広げられたことは重要であろう。中国語という言語の壁はあり、さらに克服のための検討が必要と思われた。担当教員の通訳によってしのげた部分もあるが、今日の翻訳アプリにより学生間の壁がかなり低くなっていること、また広島大学にも中国語環境で育った学生が一定数いること、日韓両国の中国語圏からの留学生の参加により互いに通訳しあうようになっていたことなどにより、まだまだ発展の可能性があるとの実感が得られた経験となった。

4.3. 2022 年度後期 e-START プログラム台湾

上述までの経験を踏まえ、2022 年度後期には再び国立政治大学楊明璋と広島大学荒見の間で、さらに実験的な e-START プログラム台湾を実施した。今回はこれまでの経験を踏まえつつ次のステップを考えた、まさに実験的なプログラムだった。その試みは、台湾という中国語でのプログラムに、中国人留学生を参加対象とした場合の効果を図ることだった。

コロナ禍に以前ほどの恐怖感を感じなくなった今日、海外渡航をともなうプログラムも徐々に再開され、2023 年度には派遣型の従来通りの START プログラムが再開されることが予想された。ただこれまでの e-START に可能性を見出してきた経験を活用したいという思いもあり、渡航型の START プログラムとオンライン型の e-START プログラムを同時開催することを想定して e-START プログラム台湾をさらにブラッシュアップしたいと考えていた。そこに中国人留学生が参加した場合の効果を考えたのである。

渡航型のプログラムが再開された場合、JASSO 海外留学支援制度や大学の支援対象により START プログラムに参加し渡航できる学生の中に中国などからの留学生は制度上含まれないことになる。かといってプログラムで提供される良質な講義や学生の交流活動にこうした留学生などの中国語母語話者が参加できないというのも惜しいことである。日本人学生は現地に派遣され、留学生の派遣はできないという不公平感はあるかもしれないが、異なる環境の学生が一方では現地で講義を聞き、もう一方ではオンラインで講義を聞き、同じ講義を聞いた後にオンラインで討論を行えたらどうであろうか。ここに日本語を介する中国人留学生が参加した場合、中国語母語話者を通じたミラーリング効果も期待できるのではないか。さらに言えば高麗大学には韓国語を解する中国人留学生もおり、高麗大学側でも同じ効果が期待できるのではないか。

このように考えた場合、高い教育効果が得られるのではないかとすることも予見されるであろう。

かくて、2022年度は2度にわたる e-START プログラム台湾の開催となったが、まずは中国語母語話者のみを集め、中国語のみの講義と討論により、授業レベルの難易度と討論されるレベルの確認を行った。いずれも国立政治大学ですでに試みてきたプログラムと同じテーマ「華人文化」「東アジア文化」に近い内容である。

以下はその実施スケジュールである。

	3月20日 (周一)	3月21日 (周二)	3月22日 (周三)	3月23日 (周四)	3月24日 (周五)
12:50 ～ 16:05	ガイダンス台湾 文化概況(荒見)	台湾のことば と文化 (荒見)	「東亜歳時習俗的 人物、食物与礼物」 (楊明璋)	「周易的學術觀」 (陳睿宏)	成果発表会 (荒見、楊明璋、 陳睿宏等)
	休憩	休憩	休憩	休憩	
16:20 ～ 17:50	質問及び 自主学習時間	質問及び 自主学習時間	質問及び 自主学習時間	質問及び 自主学習時間	

* 講義時間 12:50-16:05 (日本時間)。

* 質問及び自主学習時間では主として最終発表の準備をしてもらいます。

* 最終発表は一人 10 分程度。国立政治大学の先生方が参加されるので中国語を使用のこと。

授業時間等、前年8月に実施された「東亜漢文文学与文化(東アジア漢文文学と文化)」プログラムの経験から講義時間は短くし、学生討論と発表会準備の時間として自主学習の時間も長めにとってみた。将来的に渡航型の START プログラムとオンライン型の e-START プログラムを同時開催する場合、講義部分はオンラインにより同時配信とし、自主学習の時間に START プログラムと e-START プログラムの学生を、Teams などを使用したオンラインによるグループ学習にスライドさせることを想定している。この形であれば、e-START プログラムに中国語母語話者の留学生が多く参加していた場合、先に言うミラーリングの効果、留学生にとっての日本語学習の効果、日本語母語話者にとっては中国人留学生を介して内容理解を深める効果など、さまざまな効果が得られるのではないかと考えている。

5. まとめ

広島大学国際室では 2023 年度海外留学制度(派遣計画)で、「リアルとバーチャルの融合によって効果的な協働学習機会を提供する国際的教養人育成プログラム」が採択され、2023 年度中の 9 月を目途としてその制度を利用した新たな台湾でのプログ

ラムを展開することとなった。その成果によっていかなる効果が得られたかについては、稿を改めていずれ報告する予定であるが、ひとまずはこれまでの経緯と、この新たなプログラムを行うに至った経緯をここに紹介するのが本稿の役割である。

コロナ禍をポジティブにとらえるつもりはないが、この数年がたまたまにして新たな DX (digital transformation) の時代と重なったことにより、教育界でも様々な新技術の導入があった。それに伴う教員や学生が新たに学ぶべきスキルに時間を費やされるようになりつつも、数年前には想定もしえなかった新たな教育にチャレンジすることも可能となったのである。9月に実施を予定している新たな試みもこの時代の変化によるところが大きい。

国際交流の機会や方法もこれに抛り大きく変化し、こうしたプログラムの開発に際し、多国間での協議が必要な部分も SNS やテレビ会議システムにより、思い立ったらすぐに相談し、意見を取りまとめることもできるようになった。ここ数年で START プログラムを中心に広島大学、国立政治大学、高麗大学等とも協議を行うたびに感じることは、これまでは 3 者協議など多国間協議では複雑なステップを必要としたが、それも今は遠い昔の話である、ということであろうか。2023 年 9 月の実施を目指してリアルとバーチャルを融合させた新たな START プログラムも現在では着々と計画が練られているところであるが、計画から実施までわずか半年弱という準備期間も、現在では決して短いとは感じられないほど綿密に議論が進んでいると認識している。

このような時代において、コロナ禍を経て短期学生プログラムが完全再開されるようになれば、広島大学のこうした取り組みも含め、これまでには予想もできなかった様々な取り組みが行われるのではないかと想像する次第である。

【参考資料 1】 引率中のトラブルと対処について

事例 (1) 現地に身体を押されて転倒

学生情報	男子学生 1 名
状況	台北車站 (駅) 構内にて精神疾患者とみられる男性に身体を押されて転倒、同男性から、何か叫ばれながら絡まれた。
病院対応	特に外傷は無かったため通院せず、駅係員および警察対応のみ実施した。
引率対応	事情の聞き取り、身体的心理的な被害について数日間にわたり詳細に確認を実施した。
予防策	周囲への気配りの徹底を他学生にアナウンスした。しかし本事例は周囲への気配り等では回避に限界があり、予防は困難なケースであった。

事後 引率者から被害学生への声かけ、コミュニケーションによるケアを実施した。

事例 (2) 発熱症状

学生情報 女子学生 1 名の発熱を発端に他 1 名の発熱
状況 台北市内の宿泊所において体調不良を訴える学生が出た。
病院対応 台北市の馬偕記念医院(病院)の夜間救急科で診療を受けた。
引率対応 タクシーで馬偕記念医院へ搬送、付き添いをした。処方薬を服用させて宿泊施設の部屋で静養させた、2 名とも 2 日後には平熱となった。
予防策 睡眠、食事、休憩の積極的な取入れを他学生にアナウンスした。
事後 引率者から学生への検温確認、体調確認を実施した。

事例 (3) インフルエンザ感染

学生情報 女子学生 1 名の発症
状況 学生 1 名が、台南におけるエクスカージョン 2 日目の早朝に、39 度の発熱があった。
病院対応 台南市の台南医院(病院)にて診療を受けたところ、インフルエンザ A 型と診断された。
引率対応 タクシーで台南医院へ搬送、付き添いをした。また発熱した学生と同室の学生(無症状)を病院へ同行させた(保菌者の場合を想定し、他学生への拡散防止のため)また、発熱学生は診察後に台北の宿泊所で別室を手配し、処方薬を服用後、熱が下がるまで 3 日間、隔離した(食品、飲料は引率者が届けた)
予防策 感染源として夜市の可能性があり、見学先等の行程においては、体調のすぐれない学生は早目の見学切り上げを考慮するようアナウンスした。
事後 3 日間の隔離の後、平熱となった。また帰国 2 日前に体調も完全に回復したため、予定通り帰国することができた。

事例 (4) インフルエンザ感染

学生情報 女子学生 1 名の発症
状況 事例 (3) の学生 1 名が発症後に、台南からのエクスカージョン行程中および国立中央大学の宿舎到着後において、他 5 名の発熱者および 5 名の体調不良者が出た。

病院対応	桃園市の壠新医院にて診療を受けたところ全員がインフルエンザと診断された。
引率対応	タクシー4台で壠新医院へ搬送、付き添いをした、現地大学の学生ボランティアが同行し、タクシーの手配を補助してくれた。処方薬を服用後も、なかなか熱が下がらない学生もいた、引率者は各学生の部屋に1日3回巡回し、検温と体調の聞き取りを行った。また食料、飲料を届けた。
予防策	感染源として夜市の可能性があり、見学先等の行程においては、体調のすぐれない学生は早目の見学切り上げを考慮するようアナウンスした。
事後	3日後には全員が平熱となった。また帰国2日前に全員の体調が完全に回復したため、予定通り帰国することができた。

事例 (5) 喉 (下咽頭から食道にかけての壁) に魚の骨が刺さった

学生情報	女子学生1名
状況	台北市内における課外学習前の昼食時(台湾料理のレストラン)に出された清蒸魚(魚の全身蒸し料理)を一切れ食べた際に、骨があることを意識せずに嚥下(飲み下すこと)したため、下咽頭から食道にかけての壁に骨が刺さった。
病院対応	桃園市の壠新医院にて診療内視鏡を使用し、下咽頭から食道にかけての壁に刺さった魚の骨(約1.5cm)を抜去した。
引率対応	魚の骨が下咽頭から食道にかけての壁に刺さった直後に、引率者が学生の喉を目視で覗き込んだが、骨片が確認できなかったため、下咽頭周辺の壁に刺さっていると判断し、レストランの車両で壠新医院へ急ぎ搬送してもらい、付き添いをした。
予防策	他学生への、食事の際の、咀嚼の徹底のアナウンス。
事後	学生はその日の夕刻には回復し、他の学生たちと合流した。他学生へのアナウンスとして、特に魚料理を食べる際にはよく咀嚼してから飲み込むことを注意喚起した(台湾では魚料理を提供される頻度が高いことから)

事例 (6) アレルギー症状 蜜棗 (インドナツメ) (台湾産と思われる)

学生情報	女子学生1名
状況	エクスカーション行程中の、花蓮県の太魯閣峡谷における昼食時(原住民族料理のレストラン)に出されたインドナツメを口に入れた学

生が、口内および喉の粘膜の腫れを訴えた。当該学生のアレルギー反応（リンゴ）については出国事前に個人の身体医療情報を紙面で提出させており、引率教職員も認識していたが、学生本人もインドナツメを過去に一度も食したことが無かったため、警戒せずに咀嚼してしまい、アレルギー反応が発生した。嚥下していなかったので口の中にあったインドナツメを吐き出し、水でうがいをおこない、30分ほど休憩した後に、徐々に腫れは引いてきた。吐き出した直後に涙が数分間出た。手足の痺れなどの症状はなかった。

- 病院対応** 本人と引率教職員ならびにレストラン責任者の判断により病院への受診はしなかった。
- 引率対応** その日の終礼時刻まで、学生に急激な体調の変化が無いか、学生に同行しつつ観察した。
- 予防策** 他学生へ、珍しい食品、飲料については注意することをアナウンスした。
- 事後** 学生はその日の夜には完全に回復した。

事例（その他）遺失物（忘れ物）

携帯電話が最も多く、次に財布が多い。遺失の場所としては電車の中、バスの中、レストラン卓上、等が頻度として多い、遺失物発生防止対策については、個々人の注意に委ねられる要素が大きい。また具体的な防止対策の手法として、集団での移動時には引率者が降車および退店の際に学生に向かってアナウンスすることおよび班員や隣り合った友人同士での注意喚起を防止策としているが、効果には限界がある。レストランなどでの退店の際には、引率者で手分けして（時には学生にも協力を得つつ）卓上、椅子、周辺の床、に遺失物が無いかを確認することが、有効な対策のひとつである。

エクスカーションや見学プログラムの移動中に遺失物が発生すると、貸切りバスの運転手をお願いして引き返してもらいなどの追加金（チップ）の支払いが発生する、また本来予定されていなかった走行時間が発生し、見学先のキャンセル等、行程全体の進行に悪影響を及ぼすことが避けられない。

台湾では遺失物の届け出は日本と同様に警察署へ行う。警察署において、遺失した該当物の届け出の有無は警察のコンピューター上に反映されているか否かということから確認される。

* 健康管理意識の徹底について

2週間強の海外滞在において、効率よく最大の留学成果を獲得するためには、正し

い健康管理による、参加者の体調の良好な状態の維持が、最も必要な要素となる。また心身の健康と安全は、何にも優先して保護されなければならない事項であることから、引率者は参加学生に対して、事前研修や現地での朝礼終礼の際に具体策を挙げつつ繰り返しアナウンスし、現地における健康管理の実施を目的として学生の意識への定着を促した。

また、本プログラムは講義や見学、電車、バスによる移動を含み、毎日予定が詰まったハードスケジュールであることから、学生個人の体力差により疲労を感じる学生がいることも事後のアンケートによって判明している、そのため参加学生個人の体力に応じて睡眠時間を長めに確保することが、健康良好状態の維持実現には肝要である。夜更かしによる睡眠時間の削減は翌日の体調への悪影響となるばかりではなく、講義中の居眠り、エクサカーション先での体調不良など、本人も望まないマイナス事案に進展してしまう大きな原因となる。対策としては遅くとも 23 時～24 時には就寝することを終礼などで毎回アナウンスした。

また食事に関し、まず朝食を摂取するように心がけるようアナウンスを徹底した。台湾はコンビニエンスストアや朝早い時間からの朝食販売の店が多くあるので朝 6 時～7 時ごろに起床すれば購入が可能である、もしくは前日に準備しておく等の対応もよい。郷に入っては郷に従えの精神で朝屋台や朝外食を体験させることもあった。また、台湾では積極的に果物を摂取するように伝えた。理由は、外食が多くなることからの野菜不足、ビタミン不足にならないためであり、これについても毎回アナウンスをし、注意を促した。

*** その他、安全管理について**

プログラム参加学生の安全管理を高い水準で実現させるために必要な構成要素として、学生から引率教職員への情報提供および相談の実現、が挙げられる。それらは必要不可欠の構成要素である。そうして、それらを獲得するためには両者の円滑な関係性が求められる。引率教職員は、その円滑な関係性を獲得するために、渡航前事前講義の開始時より、引率教職員から学生に対して積極的に挨拶の実施ならびにコミュニケーションを図り、些細な内容でも気兼ねなく引率教職員へ話してもらえるような信頼関係の構築作業を行った。渡航前の段階におけるこの作業内容の充実度は、その実施回のプログラムの成否を左右するものと認識し、引率教職員の初めの到達目標として毎回到りで全力で取り組んだ。次に現地においても、朝礼終礼の点呼の際に学生の体調確認を実施し、中間面談では課外学習やエクサカーションにおける訪問予定地の近隣で行きたい場所がないかを学生に質問し、可能な限り学生の希望を採用することを実施した。また渡航期間中に誕生日が重なっている学生には現地で誕生日祝いを実施する等、一人一人の意見や一個人としての、学生個々の存在を大切にしている姿勢を

引率教職員が行動で示すことによって、参加学生個々人のモチベーションおよび参加学生全体の団結力を高めた、その結果としてプログラム内容を制限内において最大限に充実した結果を獲得するとともに、全員で安全に出発して、全員で安全に現地生活を過ごし、全員で安全に帰国する、という最も大きな目標を達成することが、現在まで全ての START プログラム台湾において実現されてきている。

【写真資料①】



START プログラム 2017 年度前期、初回合同オリエンテーション、国際室 吉永幸恵主任による説明 広島大学総合科学部講義棟 2017 年 6 月 27 日、

【写真資料②】



START プログラム 42 台湾、台中台南エクスカーション、新港奉天宮 2017 年 3 月 26 日

【写真資料③】



START プログラム 42 台湾、中国語・英語を使用しての現地学生との昼食会、天主教輔仁大学 2017 年 3 月 24 日

【写真資料④】



START プログラム 50 台湾、台南エクスカーション、安平古堡 2018 年 3 月 10 日

【写真資料⑤】



START プログラム 60 台湾、ウェルカムパーティー、国立中央大学 2019 年 3 月 4 日

【写真資料⑥】



START プログラム 60 台湾、花蓮県エクスカーション、太魯閣峡谷 2019 年 3 月 9 日

【写真資料⑦】



START プログラム 70 台湾、渡航前班別勉強会 広島大学大学会館 2020 年 2 月 6 日

【写真資料⑧】



鄭阿財教授・朱鳳玉教授 演題『台湾の媽祖について』 START プログラム 42 台湾 国立中正大学 2017 年 3 月 25 日

【写真資料⑨】



柯惟惟先生 演題『新日系外来語について』 START プログラム 42 台湾 天主教輔仁大学 2017 年 3 月 27 日

【写真資料⑩】



松尾恒一教授 演題『台湾の宗教と東アジア』START プログラム 50 国立中央大学 2018 年 3 月 8 日

【写真撮影：嘉陽礼文】